



でめきん



みんこ

雨と海

その日は7月だというのに肌寒い霧雨の降る日だった

海へ一人歩いた
家にいたくなかったのと
海が見たかったから

傘に落ちる雨の音と打ち寄せる波の音

それよりもあの声が聞こえる
「あっちゃん またおいでねえ」
優しいかすれた声
鹿児島弁なまりのあの大好きな声
もう聞けないはずなのに
響いて仕方がない

日曜日の夜

彼氏の寛人とテレビをみてわらってた
携帯の着信音
「ん?お父さんからだ。何だろこんな時間に...はいもしもし」
『あっこ...』
父の声が重い
『...おばあちゃんが亡くなったよ...』
「え?」
言葉がでなかった
動けなかった
固まる私を心配した彼が電話を変わる
「はい。わかりました。今から向かわせます。はい...はい。大丈夫です」
携帯を切った寛人
「あき!」
呼ばれてはっとする
「うそだよね?」
彼は優しい目ででもしっかりと首を横に振った

「...行かなきゃ」

「うん。お父さん達明日の朝早く串本へ向かうって。俺も行きたいけど、明日の仕事休まれへん...大丈夫?」

「大丈夫。ちゃんと見るまで信じないから。信じてないから。」

ボストンバッグに簡単に着替えを積めて電車で飛び乗った

乗った電車の乗り継ぎがわるくて、かなり時間がかかった

途中弟から電話があって

「持ち直したから。安心しておいで」

と言われ、胸を撫で下ろした

私が実家に着いたら、弟も家に着いていた

「姉ちゃんごめん。ばあちゃん死んだんだ」

「え?持ち直したって...」

「姉ちゃん一人で来るの心配やったから...ごめん」

鼓動が早くなった

「お母さんは?」

「明日朝早く発つからもう寝た。姉ちゃんも運転しなきゃいけないからもう寝な」

「うん...お父さん...」

がっくりと肩を落とした父がソファに座っていた

「今日、昼まで一緒にいたんだよ。おばあちゃん、沢山話してくれてて...でも俺適当に相槌うって...帰る時、まだなんだか話し足りないみたいな、そんな顔してたんだ...」

まだ嘘みたいだ。

きっと嘘だ。

何かの間違いだ。

無言で布団に包まった

朝6時 携帯の着信音で目が覚めた

串本の叔父からだった

でる気力がなくやり過ごす

しばらくして切れてから、父の携帯がなった

「ああ...もうしばらくしたら出るから...わかってる...はい」

一階からの父の声

いつもの声に安心する

「あっちゃん!」

母に抱きしめられた

「お母さん大丈夫？」

「大丈夫。」

少し震える母の肩をぽんぽんとなだめるようにさする

「私が運転するね」

少し上がった太陽に向かって車を走らせた

実家から母の実家の串本まで、車で約3時間

途中簡単な休憩をとりながら向かったはずなのに、毎年帰る時のようには途中の事を覚えていない

串本の家についたら、仏間に白い着物を着ておばあちゃんが寝かされていて、傍らに多津子叔母さんが座っていた

「母さん...」

そう言って母がかけよったけども、私は側に近づけなかった

「明子。お前が運転してきたんか？ご苦労やったな」

「勝叔父さん、朝電話くれたのに、ごめん」

「あーええんや。...ばあさん死んでしまったの...」

「...」

まだ信じられなかった

玄関からまっすぐのびる廊下の先に祖父が立っていた

「おじいちゃん...ただいま。」

「明子...すまんかったな...」

私の肩をぽんと叩いた祖父こんなに小さな人だった？

背の高い人ではないが、凜として自分に厳しく、堂々としている祖父なのに

『すまんかった』

その言葉の意味を知っている

その言葉が、私の胸を突き刺した

昨晚、日曜日の夜は祖父の楽しみにしている大河ドラマの日だった

もともと方耳が聞こえない祖父

そのドラマを見ている最中に、祖母はお風呂で亡くなった

溺死だった

なかなか出てこない祖母を心配して見に行ってみると、浴槽に沈んでいた人工呼吸も試みたらしいが、手遅れだったそうだ

祖母を見た祖父の、その時の感情を思うと胸が苦しくて、息苦しくなった

そして海へ逃げ出したのだ

小さい頃、学校の休みといえば、母の実家の串本へ行っていた
夏は海や川へ、冬は親戚が勢揃いして年越し、春は山菜とりやピクニック
春の串本が一番好きだった

母も仕事をしていたので、串本にいる間は祖父母と過ごす時間が長かった
祖父母は離れでそろばんと習字塾をやっていて、私と弟も、習字は祖父からも手ほどきを受けた
祖父は厳しいが、とても正しい人で、生徒達から尊敬されていた

「明子、本屋行こうか」

串本に帰ると、祖父はいつも本を一冊買ってくれた

その道、途中で会う人がみな、

「先生!こんにちは」

「先生。ご無沙汰してます」

どの人も、祖父に頭を下げ尊敬に満ちた声をかけて行く

私はそんな祖父と串本の町を歩くとき、とってもいい気分だった

対称的に、祖母は優しく温和で「よかったよかった」が口癖の人だった
短気な祖父にいつも「はよせえ」と言われながらも、おっとりとした祖母
優しくいつも諭してくれた祖母だった

波の音はいつも思っているよりも大きな音がする。

傘に落ちる雨のしずくの音と重なり、鼓動を落ち着かせてくれた。

いつもするように、きれいな貝を少し拾って帰った。

いつものように、おばあちゃんにみせなきゃ・・・

祖母

家に帰ると、皆 喪服に着替えていた。

「あっこも着替えて。」髪をまとめながら母が私に言う。

「あー・・・持って着てない。」

そうか、人が死んだら喪服着るんだった。

「えー！もう。お母さんのもう一つ上にあるから。着替えておいで。」

そんなやり取りの中も、次々に人が尋ねてくる

知らない人ばかり。

おばあちゃん、いろんな人と知り合いだったんだなあ

喪服に着替えて階段を降りていくと、弟が待っていた

「ねえちゃんなんか食べた方がいいよ。」

「ありがとう。伸樹も食べた？」

「一緒に食べよか。」

やさしい弟に救われる。

叔父が手配してくれた、お弁当を食べながら、今日ここでお通夜をすること、明日朝から火葬

して、お葬式になることなんかを話してくれた。

おばあちゃんの笑顔だけ覚えていたい

死に顔を最後の顔にしてくなくて、一度も顔をみられなかった

お通夜には雨も小降りになって、私と弟は並んでお通夜の受付をした。

来てくれる人はとても多く、祖母の人柄を感じさせた。

そうか、人は死んだとき、どんなに人に思われていたかわかるものなのだな・・・

母の里だけれど、もう母もここを出て30年以上になる。

母も知らない人も沢山いて、ましてや私と弟なんて、まったく知らない人ばかりだ。

「明子ちゃんと伸樹くん？まあ立派になられて！」なんて何人かの人に声をかけられる

私は祖母にとって初孫で可愛い存在だったかもしれないが、伸樹は特別だった。

祖母には男の子が生まれなかった。母は3姉妹で、下に2人妹がいる。

正確には一人、力叔父さんを生んだが、赤ちゃんのときに亡くなってしまった。

昔の女性にとって、男の子が生まれることは特別だった。

だから、伸樹が生まれたとき、祖母は「万歳！」と両手をあげてよろこんだらしい。

この家に初めての元気な男の子。祖母は伸樹を本当に大切にしていた。

伸樹がまだ小さいころ、祖母が伸樹を抱いてあやしていた。

どういういきさつだったか忘れたけれど、祖母は伸樹をかばって玄関の扉に手を突っ込み、ガラスで数針縫うほどの怪我をしたことがあった。

そんな痛い思いをして、血を流しながら、「のぶちゃん大丈夫？怪我はない？」と伸樹に声をかける祖母のことを覚えている。

祖母はよく言えばおっとりしていて、悪く言えば運動音痴で、よくこける。

落語の話みたいな小話が1つ。

ある日、祖母を乗せて自転車を漕いでいた祖父。

道でこぼこで弾んだ瞬間、祖母が自転車から落っこち、コロンと道に転がった祖父は何もなかったかのように走り去る。

そこに、お寺の小坊主さんが通りかかり、「運動会にはまだ早いですよ。」と一言。

その数日後、その同じでこぼこに、祖母が蹴躓いてとっさに「手をついて手を折ってはいけない！」とコロンと背中で受身をとったところに、また例の小坊主さんが通りかかり、「運動会は終わりましたよ。」と言ったとか。

小話のような本当の話だそう。

愛すべき祖母の人柄に、みな魅了されたのだろう。

その日は遅くまで参列の人が途切れなく訪れた。

次の朝早く、祖母を火葬場へ運ぶ。

縁側の方から祖母を運びだす。

父、叔父、弟、従兄弟の聡 おばあちゃんは小さくてやせっぽちだったから、軽々と運んでいく。

普通の車に乗せて、お墓の奥の森の中にある、小さな火葬場へ向かう。

とても古く、不気味な美しさがあるその火葬場へは、はじめて入った。

おばあちゃんに最後のお別れをしてください。と言われるが、やはり近くに行けなかった。

それどころか私は、

「焼いてしまったら、おばあちゃんもうもどってこれないじゃない！」って、

訳のわからないことを父にいいながら、号泣した。

体がなくなれば、本当にもどってこれない。

もうもどってこないのだ。

人は死んだら、もうもどってこないのだ。

そのときは理解できなかった。

泣く私を、父が「火葬が終わるまで時間があるから、散歩でもしよう。」と誘ってくれた。

母たちはこのまま待つらしい。

父と串本の町を歩きながら、昔はここにこんな建物があったね。とか、ここは変わらないねなんていいながら、海のそばの喫茶店まで行って、モーニングを食べた。

食べている途中で、父の携帯が鳴り、もう終わったから、葬儀場に行くように言われる。

ちょっとのんびりしすぎたね。と父と苦笑しながら、葬儀場へ向かった。

やっと、空の色が青いことに気づけるようになった。

この日は晴れだった。

お葬式の中、祖父の行動が少しおかしかった。

葬式中、写真を撮っていた。祖父は写真が好きな人だが、自分の連れ合いの葬儀の写真を残しておこうと思ったのだろうか・・・

でも、誰も祖父に聞かなかった。

お葬式が終わり、家に帰ると、仏間で母、多津子叔母さん、昨晚東京から駆けつけた紀子叔母さん3人で、祖母のお骨を覗き込んだ。

「私、母さんの骨、少し持って帰っていい？」

紀子叔母さんが言い、3姉妹で分骨をはじめた。

「私も・・・小さい骨一つもらってもいい？」

私も祖母がそばにいるみたいに感じたくて、骨を一つ分けてもらった。

祖父が、それを入れる用に、小さな鳥の絵の書いた朱肉入れをくれた。

骨になってしまったんだね・・・

3姉妹と私も混ぜてもらって、祖母の形見分けをした。

祖母は派手な人ではなかったので、沢山の宝石類なんてなく、質素なものだった。

昔は、満州鉄道に秘書として勤め、最先端のキャリアウーマンだった祖母。

髪も美しくカールして、仕事をしていた祖母に祖父が一目ぼれ。

終戦時に祖父母は結婚し、日本へ帰ってきた。

終戦のとき、毎日美しくカールしていたその髪を、丸刈りにした。

悲しくて、布団に頭をつっこんで泣いたと、祖母が話してくれた。

女だとわかると何をされるかわからないから、男に変装するためだったそうだ。

祖母は鹿児島の人間で、小さいころから、「遠くの人と結婚したらいけない」といわれていたのに、結婚したのはずーっと遠い、和歌山の端っこ串本の祖父だった。故郷から、遠く離れた串本の地で、祖母は身寄りのない人の世話をし、看取り、その人の墓の世話までしていた。

自分のことで精一杯の世の中で、そんなことができた祖母を本当に心から尊敬している。

祖母の質素なアクセサリーケースの中から、七宝焼きのブローチを一つもらった。

そして

串本から帰って何日か、気分が落ち込んで優れなくて、大切な人を失うということがはじめてだったから、どうしていいのかわからなかった。

「ねえ・・・」

「ん？」ソファでくつろぐ寛人がこちらに顔を向けながら座りなおした。

「食べちゃだめかな？」

「は？なにを？」

「おばあちゃんの骨。」

「え？・・・」

「食べちゃだめかな？」

「んー、気持ちは分かるけど、やめといた方がいいんちゃうか？」

「おばあちゃんを私の一部にしたらあかんかな？」

あまりの私の真剣な顔に、寛人も真剣な顔で

「もう、お前の一部はおばあちゃんできてるんやで。おばあちゃんから、お母さんがうまれて、お母さんからお前が生まれてるんやから。骨はもう骨でしかないんや。」

涙があふれてきた。

胸の奥のあたたかいところから、じわーっと何かがあふれ出て、私を包み込んだ。

そんな私を寛人は優しく抱きしめた。

その日を境に、私の気持ち吹っ切れたように軽くなり、日常に戻った。

小さいころ、庭で祖母と遊んでいたとき、私が祖母に言った一言

「おばあちゃんの鼻、でめきんみたいね」

親戚で集まると、よく祖母が笑いながら、「小さいころあっちゃんに言われたのよ。」って話してくれた。

私は、おばあちゃんをいつでも思い出すよ。

優しい声も、でめきんみたいなその鼻も。